

## Abstract

### 自制するアメリカ - トルーマン政権の戦後核政策

有江浩一

圧倒的核優勢を享受していたトルーマン政権時代のアメリカが、他国から核兵器による報復を受ける恐れが殆どなかったにもかかわらず、極めて自制的な核政策をとったのはなぜか？ 当時、アメリカが保有していた原爆の数が少なかったことや、国内政治あるいは国際政治の状況などの政権を取り巻く外的条件による制約があったことは事実である。その一方で、これらの制約が相当程度緩和された時期にも、トルーマン政権は核使用を自制し続けているのは興味深い。それは、政権を取り巻く外的条件に加えて、トルーマンと彼の側近たちの内的条件による制約があったことを示している。つまり、原爆の対日使用後、彼らは核兵器に対して言い知れぬ恐怖や嫌悪感をもつようになり、核兵器をめぐる彼ら自身の国民的価値意識や軍部への不信感とあいまって、自制的な核政策につながっていったのである。

『国際安全保障』第33巻第2号(2005年9月)、87 - 108ページ。

